

現代における教育の役割と初志の会

上 田 薫

一. 教育は今何を迫られているか

今日の日本の社会は不安に満ちているといっても、決して言い過ぎではないと思います。不況の底にある経済はもちろん、次つぎ矛盾が露呈される政治の世界も、私たちの失望を買うばかりです。この難局に新しい世紀を迎えて、せめて未来に希望をと願うのですが、現実はいよいよきびしいというほかありません。こういう事態のなかで将来への鍵を握るべき教育の姿は、いったいどうでしょうか。率直にいて見るにたえぬ悲しい状況は、いっこうに克服されそうにありません。ましてこれからどんな人間を育てるべきかという根本的問題が、相変わらずなおざりにされているのは、なんとも残念なことです。それは明らかに教師の責任ですが、教師を規制し弱体化する政治のありようも見逃すことができぬと思います。

世の中の人あまり気づかないのですが、政治が教育を不当に束縛しゆがめたのは、ついこの間冷戦の時代に特に顕著だった現象です。教師たちはその結果自分独自の考えをもてなくなり、無責任におちこみました。いま文部科学省はその点を反省して個性を重んじ思考力を大切にするというのですが、現場の教師たちは過去の惰性か、なかなか個性ある指導ができずにいます。五日制が定着するにしても、それでどんな迫力ある人間形成が可能になるでしょう。総合的学習は魅力あるものですが、あいも変わらぬ学力低下論で腰がふらつくようでは、せつかくの期待を裏切ることになりましょう。

科学の進歩、なかでも今の情報技術はたしかに世の中に利便を与えますが、環境問題や人口問題、そして核のこととしっかり取り組む力を人間に育ててくれるかどうか疑問です。問題を深刻にはらむ二十一世紀が人間に幸せな世界をもたらすかどうかは、やはりそこで生きる人間のあり方にかかわっていきましょう。どういうことか今は、この“人間”の問題が、はっきり核心に置かれていません。改革の必要は方々で声高に叫ばれていますが、鋭く、しかも地道にそれを遂行できる人材は、案外に乏しいのです。狭い視野に閉じこもり、一時的に場当たりのにかっこうをつける人はおびただしくいるのですが、世の流れに抗して長い見通しのもとにもちこたえ、粘りぬく人間はごく少ないということです。そういう人にはなかなか陽が当たりませんが、それでも屈せず手を取り合って壁にぶつかろうとする人たちが仲間をつくれれば、それこそ暗くよどんで、しかも上つ調子な今日の社会に貴重な風穴をあけることができると思います。「社会科の初志をつらぬく会」は、必ずしも派手なアピールはしていませんが、縁の下の力持ちに徹しながら、勇気をもって権威主義や偽善独善の不当な壁に挑もうとしています。この戦いがなければ今の社会で教育がまっとうな働きをすることはできない。そして真に望ましい教育のカこそ、錯雑した世の中の奥の

奥までしみ通って、健やかな息吹きをよみがえらせてくれる。私たちはそう確信して日夜努力を重ねています。

二、会の創成とその使命

一九四七年四月、日本を民主的な国に生き返らせるための“新教育”が開始されました。一人ひとりの個性を重んじ、人間にそれぞれよき総合を成り立たせて、自主的な責任感ある子どもを育てようとしたその教育を、根幹として背負うのが新しく生まれた平和愛好の社会科でした。当時のあの貧しくて荒廃した環境の中で、社会科の教室がどれほど楽しく活力に満ちていたか、それは当時を知るどの人の心にも残ったことでしょう。子どもも教師もこの新しい教科が大好きでした。

しかし五二年に日本が独立すると、保守の政党が政権を握り、いわゆる五五年体制が始まって、社会科は一変させられてしまいます。健全な批判的精神を育てようとしていたのが奉仕の精神養成を旨とすることになり、特色だった問題解決学習も形式的なものに去勢されました。まさしく民主主義教育の頓挫です。これは黙視できないと、文部省で社会科を誕生させた人たちを中心に心ある教師たちが結束し、あくまで最初の精神を推進して復古に傾く文部省や注入を是とする科学主義と対抗しようとした。それが私たち「社会科の初志をつらぬく会」の創成です。一九五八年のことでした。

その後冷戦が終わるまで三十年余、私たちは少数派として左と右からの攻撃にさらされながら苦難に耐え続けましたが、大切な初志を揺がすことは一度もありませんでした。そういう困難に耐えることができたのは、会の先輩教師たちがそれぞれ強固な信念の持主だったためではありますが、教育現場に根ざした確固たる理論が打ち立てられていたことも大きいと思います。そういうことから個々の子の変化を詳しく追究する授業研究が生まれました。一人ひとりの子どもをふだんから奥深く追究するカルテという手法も生まれました。

これはみなさんご承知のことですが、十数年あまり前突如冷戦が終わり世界の情勢は激変しました。そして文部省もまたこれまでの態度を急変させ、子どもの主体性・個性を尊重し、指導法としても問題解決学習を奨励するようになりました。それは皮肉なことに私たちの会がかつての文部省に反抗して守り続けてきたものと、きわめて近いものでした。今年からは総合的学習が実施されますが、すでに申したように“初志”の理念はアカデミックなものではなく、そもそもが総合の精神でした。文部科学省が教育の本来あるべき姿にもどってくれたのは何よりですが、まだまだ実績に乏しく、私たちからすれば歯がゆいところも多くあります。たとえば総合のことにしても、それが本物になるためには、最低五年くらいの地道な努力が必要です。拙速では初志は生きません。

三、会の特質—内容と方法

まず教える内容の面で考えてみましょう。足が地についた民主的人間を育てるには、一人ひとりがしっかりした自分をもてるようにするのが第一です。既成の秩序にひたすら忠実であるとか、知識の量は豊かでも自分の考えが乏しいとかいう人は、たのもしくありません。かつて受験体制が花やかだった時代にも、私たちはこの考えを貫いてきましたが、今はますます確信をもって教育実践に取り組んでいます。このところ総合的学習への批判というかたちで学力低下の論がやかましくなっていますが、本当に底力をもったたのもしい人間を育てようとするれば、平板な常識的学力論はたいそう危険だといわねばならぬでしょう。受験学力にすぐれていた若者が、はたして社会でどういう役立ちかたをしたか。自分の人生にも本当の幸せをもたらしたかどうか。個性をもった創造力こそ真の学力なのではないのか。

実は道徳性についても似たようなことがいえます。徳目を後生大事に守っているだけでは知的な判断力が眠っていますから、世の中に肝要な創造的行動ができません。むしろ社会の健全な進歩を妨げ、自分自身をも不幸にしてしまいます。そもそも道徳的であることと知的であることは、切っても切れないのです。私たちの目ざす社会科はその立場に立っています。

次に方法の面を考えてみましょう。まず私たちは一貫して問題解決学習を推進してきました。これは教え込みをやめ、子ども自身に主体的に考えさせることを通じて学力を身につけさせる方法です。思考力を豊かにするのが眼目ですが、一番かんじんの応用力が個性的に力強く育つのが何よりすばらしいというべきです。どんな事態が生じてもたよりにできる子どもが育ちます。

いずれにしても初志の会では、つねに人間性に着目し、それを大切にするとところに特色があります。すでに触れたカルテの手法によって、一人ひとりの子に深く即し、個々の違いをおろそかにしない指導法を大事にするのもそのためです。授業の記録を精密にとってそれを生かすのも、教師の子どもへの決めつけを排し、生き生きした指導を確保しようとするためです。この二つの異色ある方法は、初めて接する教師を驚かさすかもしれません、しばらくなじんでみると人間の教育としてごく当然で、不可欠のものだと感じられるようになると思います。

四、不可欠の拠点として多くの人びと

社会科の初志というのは、ただ社会科の授業を無事能率的に推し進めるということではありません。私は発足の当時文部省にいて、それを“学問観の変革”と表現しましたが、それまで軽んじられていた人間というものを何より大切に考える考え方を確立することなのです。いま教師たちは打開のむずかしい問題の山積に悩んでいます、もっと広い視野から勇気をもって取り組まねば道は開けないでしょう。どの子にも同じ成果を期待するとい

う従来のやり方では、子どもの個性的な生き方を無視しゆがめることになり、効果があったように見えても形だけの上っ面のものにとどまります。今までは教師も子どもも、そして親もそれで満足し、それ以上は諦めていました。そしてそのためにいよいよ本来のあり方は阻害されてしまったのです。初志はそのことを根底から取り返そうとしています。それによって日本人がこれからの世界にりっぱに貢献できると信ずるからです。一見安定したわくによりすがってうまく身を保とうとしているのでは、未来の創造的世界から取り残され捨てられてしまうでしょう。教師は自分を個としてきびしく生かせるような子どもを育てることがかんじんです。

教育がこのように未来に健やかに正対するようになるためには、みんながこだわりなく力を合わせることができねばなりません。だから私たちは社会科の教師だけでなく、あらゆる分野の教師たち、そして親や一般の人たちにも門戸を開き、仲間として助け合いたいと考えています。おそらく社会のどういうところにも、教育を大事にしたいと考える人はいっぱいいるでしょう。どうして結び合うことが少なかったのか。人類の平和を旨とする社会科の発展のために心魂を燃やす人間として、私たちは広く心を通じ合わせることでできる人びとのつながりの拠点になればと願っています。どの子どもどの人も幸せになる権利をもっている。教育はこの危機に直面した混迷の世界でこそ、それを保障しようとすべきです。そのためにはまずおたがい身を挺さねば。

(本会会長)

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』No.273, 2002年5月号, pp.108-111) .